汎用AIの限界を超える次世代AI戦略：富士フイルムビジネスイノベーションが描く「企業の脳」と自律型エージェントの全貌

Gemini 3.1 pro

1. エンタープライズAIのパラダイムシフトと「実証実験の死の谷」

2020年代前半に巻き起こった大規模言語モデル（LLM）を中心とする生成AIブームは、企業社会に多大な衝撃を与え、多くの組織が将来の競争優位性を確保すべくAIの導入実験に乗り出した。しかしながら、2026年を迎えた現在、ビジネス現場におけるAI活用は深刻な「実証実験（PoC）の死の谷」に直面していると言わざるを得ない。世界のテクノロジートレンドがAIの「実験」から「運用インフラ」へと移行する中、企業は導入した汎用AIが期待された投資対効果（ROI）を生み出していないという現実に直面している[1]。

この停滞の根本的な原因は、市場に流通している一般的なAIソリューションの多くが、実際の業務プロセスと乖離している点にある。富士フイルムビジネスイノベーション（以下、富士フイルムBI）の技術戦略を統括する取締役・常務執行役員CTOの鍋田敏之氏が指摘するように、ハイパースケーラーが提供する「汎用AI」は、インターネット上の広範な公開データを学習して一般的な文章やコードを生成することには長けているが、個々の企業が持つ独自のビジネスコンテキスト、業界特有の専門用語、そして何より現場の泥臭い業務フローを理解していない[3]。結果として、汎用AIを現場の業務に適合させるためには、利用者がAIの特性に合わせて自身の働き方を変えたり、精緻なプロンプト（指示出し）の設計に膨大な人的労力を割いたりする必要が生じ、ユーザーの負担を逆に増大させるという本末転倒な事態を引き起こしている[4]。

さらに、企業のAI活用を阻む最大の障壁として立ちはだかっているのが「非構造化データ」の存在である。企業内に蓄積されるデータの約9割は、紙の書類、手書きのメモ、FAX、PDF、画像、動画といった非構造化データで占められている[5]。これらのデータは企業のノウハウや競争力の源泉である「宝の山」であるが、形式が不揃いであるため、汎用AIがそのまま読み取って解釈することは極めて困難である。不動産、物流、建設、製造業など、依然として紙やFAXが重要な役割を果たす業界において、この非構造化データの壁は、企業間・業種間における「AI活用の格差（AI Divide）」を助長する主因となっている[6]。

この限界を打破するため、富士フイルムBIは「汎用AIの限界を超える、次のAI」として、業務特化型かつ自律型のAI（Agentic AI）を中核に据えた次世代技術戦略を打ち出した。同社の戦略は、AIを単なる独立したソフトウェアツールやチャットボットとして提供するのではなく、デジタルトランスフォーメーション（DX）の中核的推進力（コア・イネーブラー）としてオフィスや商業印刷の現場インフラに直接埋め込むという、極めて実務的かつ革新的なアプローチである[4]。本稿では、同社が提唱する「企

業の脳」の概念、それを支えるアーキテクチャ、そして自律型AIがもたらす産業構造の変革について、網羅的かつ深層的に考察する。

2. 埋もれた「知」を掘り起こす：「企業の脳」を構築する3層アーキテクチャ

富士フイルムBIが目指すのは、汎用的な知識を提供するAIの導入ではない。一社一社の企業内に散在する専門用語や、個々の社員に属人化している暗黙知（ノウハウ）を抽出し、それらを構造化することで、その企業にとって唯一無二の「企業の脳」を創り出すことである[8]。このビジョンは、「誰ひとり取り残さない」というスローガンの下、大企業のみならず、ITリソースが限られた中堅・中小企業に対しても等しくAIの恩恵を提供する「AIの民主化」戦略の根幹を成している[10]。

この「企業の脳」を構築し、物理空間（アナログ）に存在する非構造化データをデジタル空間のインテリジェンスへと変換するため、同社は明確な3つのレイヤー構造を持つアーキテクチャを展開している[9]。

第一のレイヤーは、「IT・セキュリティ基盤」である。AIを安全かつ持続的に運用するためには、強固なITインフラストラクチャが不可欠である。同社は「IT Expert Services」などのマネージドITサービスを通じて、顧客企業のITインフラの構築、運用、改善、そしてセキュリティ対策をワンストップでカバーする。これにより、専任のIT担当者が不在の中小企業であっても、外部からのサイバー攻撃や内部からの情報漏えいリスクを極小化し、高度なAI活用に向けた土台を整備することができる[10]。

第二のレイヤーは、「情報のゲートウェイ」である。ここに富士フイルムBIの最大の競争優位性が存在する。かつて単なる印刷・複写機として認識されていた「複合機（MFP）」は、現在ではアナログ情報をデジタル空間へ高精度に取り込むためのインテリジェントな「エッジデバイス」として再定義されている[10]。同社は、紙やFAXなどの物理メディアを画像処理AIを用いて正確にデジタル化し、後段のクラウドAIへとシームレスに引き渡す結節点として複合機を活用している。これにより、顧客は「紙の書類をスキャンする」という従来の慣れ親しんだ業務フロー（エコシステム）を一切変えることなく、自然な形で情報をデジタルデータ化することが可能となる[6]。

第三のレイヤーが、「統合プラットフォーム」である。ゲートウェイを通じて取り込まれた膨大なデータは、「FUJIFILM IWpro」をはじめとするクラウドベースのワークスペース上に集約される。ここでは、同社が1980年代から培ってきた高度な画像認識技術（視覚）と、業界ごとの専門用語や文脈を正しく理解する独自の意味解析アルゴリズム（言語）が融合し、企業特有の情報文脈を深く理解する[10]。このプラットフォーム上で、非構造化データは整理・構造化され、最終的に企業の競争力に直結する「企業の脳（ナレッジベース）」へと変容を遂げるのである[10]。

「企業の脳」を創り出す3層アーキテクチャと情報の流れ

複合機（MFP）をエッジゲートウェイとして活用し、紙やFAXなどの非構造化データをデジタル化。統合プラットフォーム上でAIが文脈を解釈し、企業固有のナレッジとして構造化するプロセス。

3.「REiLI」と5つのコアAIエージェントの展開

富士フイルムBIのAI戦略を技術的に牽引しているのが、富士フイルムグループの独自のAI技術ブランド「REiLI（レイリ）」である[6]。聡明さを意味する「怜悧」に由来するこのブランドは、2018年に医療・ヘルスケア領域で誕生した。デジタルX線機器や医療ITの分野において、人命に関わる「絶対に間違えられない」環境下で、高度な画像処理や自然言語処理の実績を積み重ねてきた[6]。2025年、同社はこのREiLIの活躍の場をオフィスや商業印刷分野へと本格的に拡張した。医療現場で培われた厳密なアルゴリズムは、FAX特有のゆがみ、かすれ、地紋、手書き文字などの複雑なノイズを除去し、情報を正確に抽出する上で、他社の汎用AIモデルに対して決定的な優位性を発揮している[6]。

このREiLIを基盤として、富士フイルムBIは業務の効率化や付加価値化を自律的に推進する「5つのコアAIエージェント」を展開している[4]。これらのエージェントは、汎用AIが苦手とする特定領域の複雑なワークフローに深く入り込み、アナログとデジタルの境界をシームレスに統合する役割を担う[4]。各エージェントの機能と提供価値は以下の通りである。

コアAIエージェント	主要機能と提供価値	対象領域の具体例

認識・構造化	テキスト、画像、図表、動画等の非構造化データを抽出し、AIが処理・理解可能な構造化ナレッジへと変換する。すべてのAI活用の基盤（指揮者役）となる。	見積書・請求書処理、現場の紙帳票のデジタル化、非定型ドキュメントのデータベース化[6]
効率化	構造化されたデータを基に、専門的な意思決定を支援し、設備最適化や業務プロセスの自動化を図る。人間の反復作業を大幅に削減する。	カスタマーセンターの問い合わせ分類、経理業務における入金消込タスクの自動化[4]
提案・付加価値化	生の顧客データや市場データを実用的なインサイトに変換し、クリエイティブな価値創出や営業戦略の高度化、意思決定のスピードアップを支援する。	業種特化情報と法令動向の掛け合わせによる経営判断支援、マーケティングオートメーション[4]
機器最適化	オフィス機器や商業印刷機などのハードウェアの稼働状況を監視し、リモート運用を管理。ダウンタイムの最小化やパフォーマンスの最大化を行う。	ベテランの複雑な機器操作の解析とワークフロー効率化、IoTセンサーデータに基づく予知保全[4]
画像・質感表現	視覚・認知メカニズムに基づき、実物以上のリアルな質感を再現する。汎用システムでは困難な複雑な手動設定を自動化し、高い生産性を保証する。	次世代商業印刷における高忠実度の視覚表現、クリエイティブ領域における色彩・質感の最適化[4]

これら5つのエージェントは独立して機能するのではなく、相互に連携しながら企業全体のデジタル成熟度を高めていく。同社はこれを「エスカレーション設計」と呼び、企業は自社のデータ整備状況やビジネスニーズに応じて、基盤となる「認識・構造化」から順次、より高度な「提案・付加価値化」や「機器最適化」へと段階的にAIの活用を深化させることができる[10]。

業務変革を牽引する5つのコアAIエージェント

すべてのデータ活用の起点となる「認識・構造化」を中核とし、オフィス業務から商業印刷領域まで、幅広い業務プロセスの自動化と付加価値創出を担う自律型AIエージェント群。

4. 認識・構造化技術のブレイクスルー：FUJIFILM IWproとテンプレートフリーの衝撃

5つのコアAIエージェントの中で、富士フイルムBIがAI戦略の成功の鍵として最も重要視しているのが「認識・構造化」エージェントである[6]。どれほど高度な予測モデルや生成モデルを構築したとしても、入力されるデータが整理されていなければ、AIはその真価を発揮することができない。

これまで、企業のバックオフィス業務においてデータ入力作業を自動化する手段としてAI-OCR技術が広く利用されてきた。しかし、従来のAI-OCRには致命的な弱点が存在した。それは、抽出したいデータ（取引先名、日付、金額など）が帳票のどこに記載されているかを指定する「事前のテンプレート設定」あるいは座標定義が必須であったという点である[15]。企業間取引においては、取引先ごとに見積書、注文書、納品書、請求書のレイアウトが全く異なるのが常であり、数百、数千に及ぶ取引先のフォーマットに合わせてテンプレートを保守・管理することは、運用担当者にとって絶望的な作業負荷となっていた。

この長年の課題に対する画期的なブレイクスルーをもたらしたのが、クラウドベースのワークスペース「FUJIFILM IWpro」に新たに追加された「Intelligent Data Capture オプション」である[4]。このソリューションは、従来の座標ベースのOCRアプローチを完全に放棄し、生成AIの高度な意味理解能

力（セマンティック・インタープリテーション）をコアに据えている[15]。

Intelligent Data Captureの最大の特徴は、**事前準備やプロンプト設定を一切必要としない（テンプレートフリー）**点にある[11]。ユーザーがすべきことは、複合機でスキャンするか、ファイルをIWproにアップロードするだけである。システムは生成AIを用いて文書の構造とテキストを解釈し、各フィールドの「意味」を自律的に理解する。たとえば、明細表において「品名」とそれに紐づく「数量」や「金額」を意味的に関連付け、それが複数ページにまたがる複雑な表であっても、ひとつの連続した正確な構造化データ（CSVファイルなど）として自動変換する[15]。また、抽出された情報の表記揺れ（例：「株式会社」と「（株）」、「電話番号」と「Tel.」）を言語処理AIが自動的に統一し、個人情報や機密情報の適切なマスキング処理までを統合的に実行する[6]。

展示会におけるデモンストレーションでは、この技術が特定業界の長年のペインポイントをいかに解消するかが具体的に示された。例えば建設・資材業においては、現場で受け取る多種多様なフォーマットの手書き納品書を、現場事務所の複合機でスキャンするだけで、事前登録なしに高精度でデータ化し、本社の会計システムやERPシステムへ直接統合できることが証明された[11]。これは、AIが単なる「文字の認識器」から、文脈を理解する「意味の解釈器」へと進化したことを示す決定的な証左であり、企業のDXを阻んできた「前処理の壁」を完全に打ち破るものである。

5. デジタルアシスタントから「デジタルワーカー」へ：Agentic AIへのパラダイムシフト

富士フイルムBIのAI戦略をより大局的なエンタープライズテクノロジーの潮流の中に位置づけると、それは「コパイロット（副操縦士）」から「自律型エージェント（Agentic AI）」への歴史的なパラダイムシフトと完全に軌を一にしている[16]。市場予測によれば、Agentic AIの市場規模は2025年の70億6,000万ドルから2032年には932億ドルへと急激に成長し、従来の生成AIの成長率を遥かに凌ぐ初期5年間で175%の年平均成長率（CAGR）を記録すると見込まれている[2]。

2024年まで主流であったMicrosoft Copilot等のソリューションに代表されるAIは、あくまで人間の生産性を向上させる「デジタルアシスタント」であった。これらのシステムは、人間が明確なプロンプト（指示）を与え、AIがドラフトを作成し、最終的な判断とシステムへの入力・実行は人間が行うというパラダイムに留まっている[16]。

これに対し、2025年後半からエンタープライズ領域で急速に台頭している「Agentic AI」は、与えられた目標（例：「顧客からのクレームを解決せよ」「在庫の欠品を防げ」）に対し、自らコンテキストを監視し、複数ステップの計画を立案・推論し、関連システムにアクセスしてタスクを自律的に実行・完結させる「デジタルワーカー」として振る舞う[16]。

比較軸	デジタルアシスタント（例：汎用**Copilot**）	自律型**AI / Agentic AI**（富士フイルム**BI**のアプローチ等）

アーキテクチャの思想	人間の作業を補助するツール（Human-in-the-loop）	自律的にプロセスを実行するデジタル労働力（Autonomous execution）[16]
起動・動作のトリガー	人間による明示的な自然言語プロンプトの入力	データの変動や事象の発生（センサー検知等）に基づく自律的起動[18]
プロセス実行能力	単一タスクの処理（文章作成、要約、コード生成等）	複数システムを跨いだエンドツーエンドの業務完結、自律的な意思決定[16]
推論と論理構築	過去のパターンマッチングに基づくテキスト生成	目標指向型の自律性（Goal-oriented autonomy）、環境変化への適応、自己検証[17]
企業にもたらす価値	従業員個人の作業時間の短縮（タスクレベルの効率化）	組織のビジネスプロセスそのものの再設計、リソース依存の根本的低減[4]

富士フイルムBIが展開するソリューションは、このAgentic AIの概念を具現化したものである。単にデータを予測・分析する（Predicting）段階から、実際に行動を起こし業務を完了させる（Acting / Ensuring completion）段階へと進化している[1]。例えば、産業機器や複合機の運用において、AIエージェントはテレメトリデータを継続的に監視し、異常を予測するだけでなく、自律的にダウンタイムの最小化に向けた計画を立て、交換部品の自動発注やメンテナンス要員のスケジュール調整までを人間の介入なしにオーケストレーションする[4]。

さらに、この高度な自律性をエンタープライズ規模で持続可能にするため、同社は巨大で演算コストのかかる汎用LLMへの過度な依存から脱却し、特定のタスクやドメインに特化して最適化された**小規模言語モデル（SLM: Small Language Model）**の活用を推進している[20]。SLMをAIエージェントの推論エンジンとして採用することで、エッジデバイス（複合機等）に近い環境において、推論にかかるレイテンシを劇的に削減しつつ、機密性の高い企業データを外部のクラウドに過度に送信することなく、安全かつ経済的に処理することが可能となっている[2]。

6. オープンイノベーションとエコシステムの拡張：neoAIとの戦略的提携

高度なAgentic AIを実現するためには、企業内に眠る非構造化データをAIが正確に参照できる仕組み、すなわちRAG（Retrieval-Augmented Generation：検索拡張生成）の高度化が不可欠である。富士フイルムBIは、この領域において自社技術への囲い込み（クローズド・イノベーション）を避け、

外部の先進的な知見を積極的に取り入れるオープンなパートナーシップ戦略を採用している[6]。

その象徴的な事例が、東京大学松尾豊研究室発のAIスタートアップであり、生成AI技術に特化したソリューションを提供する株式会社neoAIとの技術・販売提携である[22]。2025年4月の基本合意に基づくこの協業の第一弾として、富士フイルムBIが国内外で累計1,000万ライセンスを超える導入実績を持つドキュメントハンドリング・ソフトウェア「DocuWorks」と、neoAIが開発した法人向け生成AIプラットフォーム「neoAI Chat」のシームレスな連携機能が提供開始された[6]。

これまで、企業が独自のドキュメント群を用いて精度の高いRAG環境を構築しようとした場合、文書ファイルをAIが読み取れる形式（プレーンテキストや特定の構造化フォーマット）へ事前に手動で変換する煩雑な「データ前処理」の壁が存在した。しかしこの連携により、ユーザーは「DocuWorks」上で日常的に管理されているPDF、Word、Excel、PowerPointなどの業務ファイルを、一切の形式変換を行うことなく直接「neoAI Chat」へアップロードすることが可能となった[6]。アップロードされたファイルは、富士フイルムBIのOCR技術によって即座に文字情報が抽出され、neoAIの高度なRAGエンジンによってAIの知識データベースへと統合される[6]。

この統合により、AIは単なる一般的な回答ではなく、企業固有の過去の文書内容に基づいた極めて専門的かつ正確な回答を生成することができるようになる。実証実験における具体的な成果として、九州電力株式会社の事例が挙げられる。同社では、DocuWorksに蓄積された過去の膨大な工事仕様書や購入仕様書といった工事関連資料をAIに直接読み込ませることで、熟練技術者の経験や記憶に頼ることなく、AIが類似の過去案件から必要な知見を瞬時に抽出し、新たな工事資料作成に係る工数を劇的に削減することに成功した[6]。また、みらいコンサルティンググループの事例においては、給与計算や税務申告といった厳密性が求められるアウトソーシング業務において、AIがDocuWorksファイルから必要なデータを自律的に参照し、業務のチェックポイントを事前に提示する仕組みを構築した。これにより、人間の担当者が行っていた初期の確認作業が自動化され、作業全体の工数を約40%削減するという目覚ましい生産性向上を実現している[6]。

この提携は、富士フイルムBIが持つ圧倒的な「アナログとデジタルの接点（ドキュメントハンドリングとOCR技術）」と、neoAIが持つ最先端の「生成AI推論・RAG技術」が融合した好例であり、企業が自社の情報資産を手軽かつ最大限に活用できるプラットフォームの完成を意味している。

7. グローバル戦略と産業DXの牽引：2026年の展望

富士フイルムBIのAI戦略は、日本国内に留まらず、急速なデジタル化が進むアジア太平洋地域（APAC）全体を見据えたグローバルな事業展開の中核を成している。シンガポールにおける同社グループの事業展開60周年（SG60）に際し、FUJIFILM Business Innovation SingaporeのCEOであるWee Tee Hsien氏は、製造業、ヘルスケア、半導体など多様な産業が集積する同国を戦略的ハブと位置づけ、AI主導のDXソリューションをアジア全域に展開する方針を明確に示している[25]。シンガポールにおいては、Trusted Hub、Bizmann System、ReN3といった戦略的パートナーとのMOU締結を通じて、データ管理からAI主導のプロセス自動化に至るエンドツーエンドのDXソリューションの提供を強化している[25]。

特に注目すべきは、タイ市場における戦略的投資である。タイのデジタルトランスフォーメーションお

よびITインフラ投資市場は、2030年までに4,896億1,000万バーツに達すると予測されており、AI産業単体でも2023年から2030年にかけて年平均成長率20～25%という急激な拡大が見込まれている[4]。FUJIFILM Business Innovation (Thailand)の社長であるMasaaki Yanagiya氏は、「我々はもはや単なるプリンター会社ではない。ビジネスのためのイノベーションを推進する存在である」と宣言し、ハードウェア、ソフトウェア、そしてAIエージェントを統合した「ワンストップDXパートナー」としてのポジションを確立している[7]。

同社は、厳しい市場環境にある従来のプリント事業の課題を相殺するため、ビジネスソリューション事業（ドキュメントソリューションやAIサービス）の売上比率を全体の30%以上に引き上げる目標を掲げている[7]。この成長戦略は、サステナビリティ目標（SVP2030）とも密接に連動しており、AIを活用したサプライチェーンの効率化やリモート機器管理を通じて、2030年までにCO2排出量を50%削減するという環境負荷低減の取り組み（Green Value Products）を並行して推進している[4]。AIの導入は、単なる企業の利益追求ツールではなく、産業全体のエネルギー効率を高め、持続可能な経済成長（スマート・サステナブル・グロース）を実現するための重要なインフラとして機能しているのである[2]。

8. 結論：業務プロセスの再設計と「AIの民主化」の実現

2026年以降のエンタープライズ市場において、企業の競争優位性を決定づけるのは「どれだけ巨大なパラメータを持つ汎用LLMを導入したか」ではない。真の勝敗を分けるのは、「自社に埋もれた非構造化データをいかに効率的に構造化し、それを自律的に行動するAgentic AIと連動させて、旧態依然とした業務プロセス全体を再設計（リデザイン）できるか」である[2]。

富士フイルムビジネスイノベーションが展開する次世代AI戦略は、長年培ってきた画像・言語処理技術（REiLI）と、複合機という極めて実体的な顧客接点（エッジデバイス）を最大限に活用し、汎用AIがクラウドの向こう側からでは決して到達できない「現場の文脈」に深く根ざしたソリューションを提供している。事前設定を一切必要としないIntelligent Data Captureによるテンプレートフリーのデータ抽出や、neoAI等の外部の先端技術を柔軟に取り入れるオープンなプラットフォーム設計は、長年企業のDXを阻んできた「データ前処理の壁」と「技術的ハードル」を同時に打ち砕くものである。

同社の取り組みは、AIを単なる個人の生産性向上ツール（コパイロット）から、企業システム全体を最適化し、自律的に業務を遂行する「企業の脳」へと昇華させる試みである。紙とデジタルの境界、そして人間の判断とAIの自律実行の境界を滑らかに繋ぐこの「AIの民主化」戦略は、ITリソースの限られた中小企業からグローバルエンタープライズに至るまで、あらゆる組織の働き方を根本から革新する。汎用AIの限界を超えた先に広がるのは、AIが人間の仕事を引き受けるだけでなく、組織の知恵を持続的に蓄積し、ビジネスの成長を生涯にわたって伴走支援する、新たな「知の共創社会」の姿である。

引用文献

1. 2026 Healthcare Predictions: Why the AI "Pilot Era" Is Officially Over, 3月 10, 2026 にアクセス、https://hitconsultant.net/2025/12/16/2026-executive-predictions-why-the-ai-pilot-era-is-officially-over/

2. 12 New Technology Trends in 2026 | StartUs Insights, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.startus-insights.com/innovators-guide/new-technology-trends/
3. 富士フイルムビジネスイノベーションの新世代AI 汎用AIの限界を, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fb/lp/business_dx/article04
4. FUJIFILM Business Innovation (Thailand) Announces 2026 Strategy ..., 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fbth/en/news/important-news/2026-strategy-announcement
5. 富士フイルムビジネスイノベーション株式会社 - 出展社詳細, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.nextech-week.jp/autumn/ja-jp/search/25/directory/directory-details.html.org-7554bbea-caba-4ba7-b2d6-c7a034130a47.html
6. AI・人工知能EXPO 特別講演レポート : 富士フイルムビジネス ..., 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fb/company/technical/ai/related-info001
7. Fujifilm BI accelerates AI-driven transformation - Bangkok Post, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.bangkokpost.com/business/general/3185679/fujifilm-bi-accelerates-aidriven-transformation
8. ビジネスDXが、企業を一気に強くする。| 富士フイルム ... - Fujifilm, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fb/ja/sp/business-dx
9. 企業の「脳」を創り出す 富士フイルムビジネスイノベーションの全貌, 3月 10, 2026にアクセス、https://diamond.jp/articles/-/382625
10. 富士フイルムビジネスイノベーションの新世代AI 汎用AIの限界を ..., 3月 10, 2026にアクセス、https://japan.zdnet.com/extra/fbj_202601/35242631/
11. 富士フイルムビジネスイノベーション、国内最大級のAIイベント「AI ..., 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fb/company/technical/ai/related-info002
12. 富士フイルムビジネスイノベーション、AI戦略を発表医療現場で培, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fb/company/technical/ai/news20250527
13. エスカレーション設計で提供する REiLIのコアAIエージェント ..., 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fb/company/technical/ai/pillars
14. AI技術開発の取り組み : REiLI : 富士フイルムビジネスイノベーション, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fb/company/technical/ai
15. FUJIFILM Business Innovation launches Generative AI-powered, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fbglobal/eng/company/news/release/2025/2889
16. Agentforce vs Copilot: How SMBs Actually Deploy AI Agents, 3月 10, 2026にアクセス、https://sailwayz.com/agentforce-vs-copilot/
17. Top 8 Enterprise AI Trends That Will Shape 2025 - Coworker AI, 3月 10, 2026にアクセス、https://coworker.ai/blog/enterprise-ai-trends-2025
18. Agentic AI and the Next Leap in Industrial Operations - RTInsights, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.rtinsights.com/agentic-ai-and-the-next-leap-in-industrial-operations/
19. AIエージェントとは？生成AIとの違いや仕組み・導入例 ... - Fujifilm, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.fujifilm.com/fb/ja/solutions/columns/ai-11873
20. PROGRAM DAY1 GenAI/SUM 2025 - Blueprint for the Evolving AI, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.xsum.jp/gai/en_program_day1.html

21. 2024 tech trends report | aner, 3月 10, 2026にアクセス、https://aner.org.br/wp-content/uploads/2024/05/Tech_trends_report_2024.pdf
22. neoAI、「neoAI Chat」と富士フイルムビジネスイノベーションの, 3月 10, 2026にアクセス、https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000030.000109048.html
23. 富士フイルムBI neoAIと販売・技術提携に向けた協議を ... - OAライフ, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.oalife.co.jp/topic/7063/
24. 富士フイルムBI「DocuWorks」と「neoAI Chat」が連携開始 生成AI, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.newprinet.co.jp/%E5%AF%8C%E5%A3%AB%E3%83%95%E3%82%A4%E3%83%AB%E3%83%A0bi%E3%80%80%E3%80%8Cdocuworks%E3%80%8D%E3%81%A8%E3%80%8Cneoai-chat%E3%80%8D%E3%81%8C%E9%80%A3%E6%90%BA%E9%96%8B%E5%A7%8B%E3%80%80%E7%94%9F
25. FUJIFILM Business Innovation Singapore launches strategic, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.biospectrumasia.com/news/46/26678/fujifilm-business-innovation-singapore-launches-strategic-partnerships-to-spearhead-ai-driven-digital-transformation.html
26. Fujifilm Group Celebrates 60 Years of Innovation as a Strategic, 3月 10, 2026にアクセス、https://www.prnewswire.com/apac/news-releases/fujifilm-group-celebrates-60-years-of-innovation-as-a-strategic-regional-hub-in-singapore-302541765.html